

香取遺産

vol.
238

小見川祇園祭の屋台と風流

小見川地区小路^{しょうじ}に所在する須賀神社は、戦国時代には統治者である栗飯原氏が祈願所としていたと伝わり、江戸時代になり領主が変わってもその時々々の領主に信仰されてきました。現在は小見川の黒部川西側6町の鎮守として親しまれています。

7月中・下旬に開催される小見川祇園祭は、屋台が曳き廻される地区を代表する行事です。

現在の小見川地区には6台の屋台が存在します。いずれも4輪で上下に重なる2層の高欄^{こうらん}を持ち、上部の高欄の上には唐破^{から}風屋根が設けられています。曳

き廻し中は下部の高欄と屋台の中^{はな}で囃子が演奏され、時折屋台を停止させると囃子に合わせて曳き手による踊りが披露されます。上部の高欄で歌謡などの芸能が披露されることもあり、芸能の披露が終わると囃子の演奏が始まり、曳き廻しが再開されます。

小見川地区は明治13(1880)年・20(1887)年・21(1888)年に大火にあっており、

そのため資料が少なく祇園祭に屋台がみられるようになった時期は不詳ですが、江戸時代後期と考えられています。建造年

が分かる最古の屋台は明治19(1886)年建造の川端のもの

です。6台の屋台の大きな構造は佐原の山車の特徴を取り入れていることが明らかです。大きな違いは小見川の屋台は上部の高欄が

屋根を持つ芸能の舞台となることとであり、佐原の山車は屋根がなく、人形などの飾り物を置く場であることです。小見川の屋台と同様に屋根を持つ屋台は多

古町、東庄町に見られ、佐原の山車のように人形を飾る山車は茨城県潮来市、鹿嶋市、行方市などに見られます。各地では最

上部の屋根の有無、使い方などの独自の発展があり、それぞれの風流が伝承されています。

小見川祇園祭の屋台については、令和5年に「須賀神社・小見川祇園と小路町屋台」が出版

され、小路の屋台を中心に全ての屋台と祇園祭について資料がまとめられています。



▲須賀神社



▲川端の屋台の曳き廻し